

# 日本語の動詞の願望形

## —アゼルバイジャン語、ロシア語と対照の観点から—

ジャリルベイリー・オグタイ（バクー国立大学東洋学部極東言語・文学学科）

ogtay\_jalilbeyli@yahoo.com

### 【要旨】

様々な研究によると動詞の形カテゴリーは一般的な言語学、及び日本語における言語学においてまだ明らかになっていない問題として残っている。アゼルバイジャン語・ロシア語・トルコ語・日本語の文法研究には動詞の願望形には特別な形態論的な特徴がある。この観点から見ると、アゼルバイジャン語・トルコ語・日本語は文法的に似ていることが分かり、他言語システムに族しているロシア語は特別な形態論的な特徴がなく、願望形は違う方法で表している。

アゼルバイジャン語・トルコ語は -a, -ə (-e) の接辞、日本語は **-たい** / **-たがる** の接辞によって作られる願望形の意味論は、テキストを参考にすることによって明らかにすることができる。

### 1. はじめに

一つの言語の文法上のカテゴリーが、世界の言語全てにおいてに相当だということはない。世界の言語それぞれは文法上のカテゴリーシステムを持っている。一つの言語の文法上のカテゴリーは他の言語と多少異なるところがある。

文法上のカテゴリーの生成と発達は人間の思索に関係している。人間の世界における想像の意見などの変化に伴い、それからは進化、発達していく。

そのため言語の法カテゴリーは、世界の言語全体で共通する文法上の意味を持つ。しかし、法カテゴリーは世界の言語全体にあるとは言えない。形カテゴリーは文法上に現れる言語では、そのカテゴリーの数も様々である。

例えば、動詞の形は、ペルシャ語では3つ（直説、命令、必要）、パシュトー語では4つ（直説、命令、条件、可能）、トルコ語では5つ（直説、命令、条件、必然、願望）、アゼルバイジャン語では6つ（直説、命令、条件、必然、願望、必要）である。（Kochergina 1979）

日本語では動詞の形カテゴリーの数について異なる意見がある。ニコライ・ヨシフォヴィチ・コンラッド（N. I. Konrad 1937）は“Синтаксис японского языка「日本語の統語論」”という著書において、日本語の形カテゴリーを基本と不基本の2つのグループに分けた。Konradによると「日本語の動詞は形によって変化する。その形は3つである。」

1. 直説形
2. 命令形
3. 願望形

その他に複文の中において条件形と譲歩形もあると Konrad は述べている。また Konrad は以

下のように述べている。「命令形、直説形、願望形は基本であり、文の述語になることができる。」(N.I.Konrad 1937)

一方 Lavrentyev は日本語の文法に関する書籍は、日本語の動詞の願望形には2つの形があると述べられている。「たい」と「たがる」という。(Lavrentyev 1982)

V.A.Kochergina (1979) は日本語の形カテゴリーについて述べる際、形の数を6つだと主張している。それらは以下の通りである。直説形、命令形、条件形、必然形、必要形と譲歩形である (Kochergina 1979)。

上記から明らかなように、様々な言語では動詞の形カテゴリーについて様々な意見が残っており、意見は一致しない。形カテゴリーは、英語の理論的な文法を研究している I.P.Ivanova、V.V.Burlakova、G.G.Pocheptsova らの研究による、この意見があらゆる角度から説明されたが動詞の形の数について色々な問題が残っている (B.P.Lavrentyev 1982)。

この小論文では、日本語・アゼルバイジャン語・ロシア語、およびトルコ語の動詞の願望形の意味と構造の類似点・相違点について述べる。

## 2. 調査方法

本稿では対照による比較を行った。文の対照に基づいて日本語・アゼルバイジャン語・トルコ語の形態論的な特徴の発展傾向を明らかにした。比較によって3つの言語の膠着のレベルは文法規則に依拠することを明らかにした。

## 3. 調査内容

まず、日本語・アゼルバイジャン語・トルコ語では動詞の願望形は形態論的なカテゴリーであり、ロシア語と異なっている。希望、願望を表す表現は他言語でもあるが、その表し方は違う。日本語を研究している学者 V.A.Kochergina、B.P.Lavrentyev は願望形について述べる時そのように特徴づけている。ロシア語では願望形の特別な形態論的なシンボルがない。そのため、日本語の願望形の文をロシア語に訳す時は、願望の意味を表す“**хотеть**”という動詞を補助動詞として使う。

(表 1) <u>日本語</u>	(表 2) <u>ロシア語</u>
<u>行きたい</u>	<u>хочу</u> идти
<u>見たい</u>	<u>хочу</u> смотреть
<u>食べたい</u>	<u>хочу</u> есть
<u>来たい</u> <u>хочу</u> прийти	

(N.I.Konrad 1937)

日本語には願望を表すための語彙があり、及び助詞もあるが希望の意味を表しても接辞を付加しないためにこの小論文ではそれらには言及しない。

本小論文の目的は膠着語である日本語とアゼルバイジャンの文法カテゴリーの形態素を対照する

ことである。

日本語ではアゼルバイジャン語とトルコ語と同じく願望形の特別な形態論的なシンボルがある。それは以下のようなものである。

(表 2)

<u>日本語</u>	<u>アゼルバイジャン語</u>	<u>トルコ語</u>
—たい/—たがる —tai/-tagaru	-a //ə	-a //e

表 2 から分かるように、日本語で願望形を作るには「—たい」という接尾辞を使う。しかし、N.I.Konrad (1937) によると、願望を表すために「—たがる」も使う。「—たがる」は発言者は自分以外の希望、願望を発話するとき使うとされている。

願望形の「—たい」接尾辞は、文法上の(形態論的な)接尾辞であるため語彙上の単位として具体的ではなく、抽象的である。日本語の願望形の「—たい」接尾辞が付いた単語を、願望形の形態論的なシンボルがない言語に訳す時は、語彙上の単位を使わないといけない。そのため、上記で出した例では、「行きたい、見たい、食べたい、来たい」はロシア語で、“хочу идти, хочу смотреть, хочу есть, хочу прийти”として訳すほかない。これらの例から、ロシア語で動詞の願望形を作る時、2つの動詞が使われるということが分かる。このような点がロシア語と日本語の形態論的な違いである。ロシア語と違って、日本語の「—たい」接尾辞がついた願望形をアゼルバイジャン語に訳すには同じように接尾辞を付けるだけでよい。

(表 3)

<u>日本語</u>	<u>アゼルバイジャン語</u>
行きたい	gedam
見たい	baxam
食べたい	yeyam
来たい	gedam

一方で願望接辞を使う際日本語にはない、アゼルバイジャン語の特徴が以下の通りに現れる。「日本語とアゼルバイジャン語の対照から、この両方の言葉とも願望形は形態論的な接尾辞を持っていることがわかる。」

アゼルバイジャン語で一つの接尾辞の複数のバリエーションがあるように見えるのは、接尾辞のつく単語の母音が front vowel か back vowel かであることに関係がある。

(表 4)

<u>アゼルバイジャン語</u>	<u>日本語</u>
alam (al + a + m)	買 <u>たい</u> (kai+tai)
bilam (bil + ə + m)	知 <u>りたい</u> (shiri+tai)
oxuyam (oxu + y + a + m)	読 <u>みたい</u> (yomi+tai)

güləm (gül + ə + m)

笑いたい (warai+tai)

この単語の音声組織と接尾辞はアゼルバイジャン語の音声学に従っている。

日本語の願望形の使用にも特徴がある。B.P.Lavrentyev (1982) は日本語の願望形について以下のように述べている。「敬語になると「-たい」接尾辞の後に「-です」を加え、否定形になると「-ない」は「-ないです」または「-ありません」が加える」(B.P.Lavrentyev 1982)。

現在アゼルバイジャン語の願望形に一定の単語を加え、その意味を変えることが可能である。例えば、「行こうかな？」(躊躇意味)「一杯お茶を飲んだら」(叶わなかった願望の意味)「読んだら」(強い願望),「隣の人が知っているかしら」(願望の意味),「知るべき」-(必要の意味)などである。日本語もアゼルバイジャン語も動詞の願望形に注意する様々な分類があり、日本語では形態論だけではなく、統語論として説明できることもある。アゼルバイジャン語の願望形も統語論的に扱う場合があるが、主に形態論的に研究されている。M.Huseynzade (1980)によると、文の中で接頭辞によって希求法の意味は変化することがある。アゼルバイジャン語では“gərək (絶対/ ~べき) + -a // -ə (願望形の接尾辞)”は希望、願望の意味から離れて、必然的な意味を持つようになる。

さて、アゼルバイジャンの言語学者 (M.Huseynzade 1980) は、日本の言語学者と同じく文脈 (コンテキスト) に基づいて研究を続けている。アゼルバイジャン語で動詞の願望形は命令法と同義語として使われる場合もある。例えば、-a // -ə は文の中で最も使っているのは必然の意味である。

彼はこの用事をするべきだ。

こちらには-a // -ə の文法的に意味は “kaş (もし)、bəlkə (多分)、gərək (絶対/ ~べき)” のように法助動詞、また idi 接頭辞によって願望形の意味が変化することがある。日本の言語学者と同じく文脈に基づいて研究を続けている。B.P.Lavrentyev (1982) は日本語の願望形にある述語の3種類を分類している。

(表 5)

種類 1

名詞+が (願望形述語の対象)	動詞+たいです (願望形述語)
--------------------	--------------------

本が読みたい。

種類 2

名詞+を (願望形述語の対象)	動詞+たいです (願望形述語)
--------------------	--------------------

手紙を書きたい。

種類 3

名詞+を (願望形述語の対象)	動詞+たがる (願望形述語)
--------------------	-------------------

私の論文を見たがっている。

日本語・アゼルバイジャン語の研究から明らかなように、願望形は「-たい」以外の意味でも種類がある。

(表 6)

<u>アゼルバイジャン語</u>	<u>日本語</u>
İcəm	飲んだら/ 飲みたい
İstirahət edəm	休んだら/ 休みたい
Universitetə daxil olam	入学したら/ 入学したい

例

**Mən vətənə borcluyam, borcumu verəm gərək.**

私は母国に対する義務を持っている、その義務を果たすべきだ。

**Uğrunda hər bəlaya sinəmi gərəm gərək.**

そのためにすべての不幸と戦うべきだ。

**Onu belə həmişə ağ gündə görəm gərək.**

それを（母国を）このようにいつも幸せな様子で見るとべきだ。

日本語では「-たい」接尾辞が付いた願望形動詞は、疑問や意図の意味を持っている文では2人称また3人称の願望を表す役割をしている。

例：彼女もあなたに会いたいですよ。

一緒に行きたくありませんか。

その他に、「-たい+と思う」構造を持っている動詞は意図的な目標を意味する。

例：来月行きたいと思います。

現代アゼルバイジャン語にも同じものが見られる。接頭辞“**gərək (絶対/ ~べき)** + -a // -ə (願望形の接尾辞)”という構造の文では動詞が意味変化される。

例

**Gərək** günəş dağları aşıb sönməyəydi.

日が山の後ろに沈まないべきだ。

Buraya **gərək** neftsiz dərə deyəydilər.

ここに石油が入ってない井戸と言うべきだ。

Bunu deməyimə peşman oldum. **Gərək** deməyəydim.

これを言って、後悔した。言うべきではなかった。

言語学者は接頭辞“**gərək**”は願望形と一緒に使うと希望・願望の意味をすることを失っていて、必然・必要の意味をすることを主張している。この時文の全体的な意味は接頭辞“**gərək**”の意味を中心としている (M.Huseynzade 1980)。

日本語もアゼルバイジャン語も願望形の意味を強化することが可能である。アゼルバイジャン語では、接頭辞“**kaş // kaş ki**”が使われている。この接頭辞は願望形の全人称と一緒に使われて、願望・希望の意味を強化する。

「**Kaş ki**」は日本語の「**もし**」に該当する語である。

例

**Kaş ki, sizin dildə danışam.**

もしあなたの言葉で話せば

**Kaş ki, müəllimim özün olaydın.**

もしあなたが私の先生だったら

**Kaş ki, bütün yoldaşlar Əziz kimi təvazökar olaydılar.**

もし同僚みんながアジジさんのように内気な性格でいれば

日本語もアゼルバイジャン語も願望形の否定形がある。アゼルバイジャン語は**-ma// -mə** 接尾辞によって否定形、日本語は「**～ないです**」・「**～ありません**」によって否定形を作る。日本語とアゼルバイジャン語の願望形の否定の例文は以下のとおりである。

日本語

アゼルバイジャン語

会いたくない/ 会いたくありません Görüşməyəm/ Görüşmək istəmirəm

行きたくない/ 行きたくありません Getməyəm/ Getmək istəmirəm

見たくない/ 見たくありません Baxməyam/ Baxmaq istəmirəm

したくない/ したくありません Etməyəm/ Etmək istəmirəm

読みたいくない/ 読みたいくありません Oxuməyam/ Oxumaq istəmirəm

日本語の願望形の特徴のもう一つは、「食べる」、「飲む」などの「**～たい**」形は他動詞であるのに、「**が**」を求めることである。例：ビールが飲みたい。

日本語では、アゼルバイジャン語と違って、人称カテゴリーとその接尾辞はない。しかし、動詞は「**～たいです**」のように使われると、通常一人称であると認定される。

例： 飛行士になりたいです。

飛行士になりたいのは私

一人称の否定は以下のようなになる。

彼には会いたくないです。

その他、「**～たいです**」は一人称だけではなく、他の人称の希望・願望を表す時も使われる。

アゼルバイジャン語では、日本語と違って、人称カテゴリーとその接尾辞があるので、他の形式や組織などの必要はない。それは肯定と否定の文両方も同じである。

例：彼も行きたいでしょう

(表 7)

	単数	複数
一人称	gedəm	gedək
二人称	gedəsən	gedəsiniz
三人称	gedə	gedə(lər)

表からも分かるように、アゼルバイジャン語では単数の3人称だけは接尾辞がない。また、複数の三人称は接尾辞“-lar, -lər”はあるが、よく書略される。三人称の単数と複数の区別文脈によって明らかになる。日本語の場合、3人称の希望・願望を表すためには「一たがる」が使われる。

例：誰もその芝居を見に行きたがらない。

願望形と時制との関係については以下のような意見がある。日本語とアゼルバイジャン語の願望形は文法上の時制と関係がない。時間は文脈によって認識される。日本語もアゼルバイジャン語も願望形の動詞は未来形であると認識されている。それは、願望されている動詞は実際未来に起こると考えられるからである。

さて、日本語とアゼルバイジャン語の対照研究から以下の点が明らかになった。日本語とアゼルバイジャン語の願望形は形態論的特徴は日本語とアゼルバイジャン語で類似している。一方でアゼルバイジャン語の願望形は状況、文脈によって意味用法は多くの種類に分けることができる。例えば、命令の意味として願望形を使うこともできる。動詞の形は文脈によって似ている意味を表す場合がある。動詞の願望形は動詞の他の形、例えば、命令形、必然形などの意味を表す場合がある。

トルコ語の条件法の接尾辞“-sa// -se”、現代トルコ語で願望形の意味を表す。“-sa// -se”の付いた動詞が述語になる文は、強い願望の意味を表す。そして、このような文は、従属複文として使えなく、独立した文になる。例えば、願望形の“Gideyim, bir bardak kahve içeyim”「行って、一杯コーヒーを飲みたい」の代わりに、条件法の“Gitsem, bir bardak kahve içsem”「行って、一杯コーヒーを飲んだら」方がよく使われる。アゼルバイジャン語とトルコ語の願望形の接尾辞は同じであっても、文をこのように取り換えて使うのはアゼルバイジャン語に当てはまらない。アゼルバイジャン語の条件法の接尾辞は従属複文で使われる。これは日本語でも同じである。

さて、日本語とアゼルバイジャン語の願望形は、文法上の接尾辞によって作られる。アゼルバイジャン語の“-a// -ə”、日本語の「一たい//一たがる」は意味的に豊富である。日本語の願望形をアゼルバイジャン語に訳す時、似たような形式になる。それはロシア語になると状況が変わってくる。Konrad“Синтаксис японского языка”の本で次のように書かれてある「ロシア語の願望

形と “хотеть” と間違わないことは大事だ。日本語で「欲する」という動詞も使われる (N.I.Konrad 1937)。この願望形 “istəmək - хотеть” の動詞の意味は間違えられないことだ。日本語には「欲する」という動詞は istəmək - хотеть の意味を持つ。Konrad は日本語には願望の意味を持つ動詞が動詞の願望形に導入することを勧めている。

#### 4. まとめ

アゼルバイジャン語で形カテゴリーは様々な問題を抱えているカテゴリーである。それは日本語でも同じだと思われる。

本小論文では、アゼルバイジャン語と日本語の願望形を対照し、似ていることがあると分かった。両方とも願望形の文法上の接尾辞を持つ (“-a//ə” 「-たい//ーたがる」)。願望形の意味的な特徴を分かるためには、文脈を見れば良い。

#### 参考文献

1. Huseynzade M. (1980) Modern Azerbaijan language (II part) Scientific Academy of Azerbaijan Linguistic Institute. Baku.p.348
2. Ivanova I.P., Burlakova V.V., Pocheptsov G.G. (1981) Theoretical grammar of modern English language. p.69
3. Kochergina V.A. (1979) Introduction in linguistic. Moscow University. p.113
4. Konrad N.I. (1937) Syntax of Japanese language. Moscow.pp.185,192
5. Lavrentyev B.P. (1982) Tutorial of Japanese language. Moscow. pp.157-159